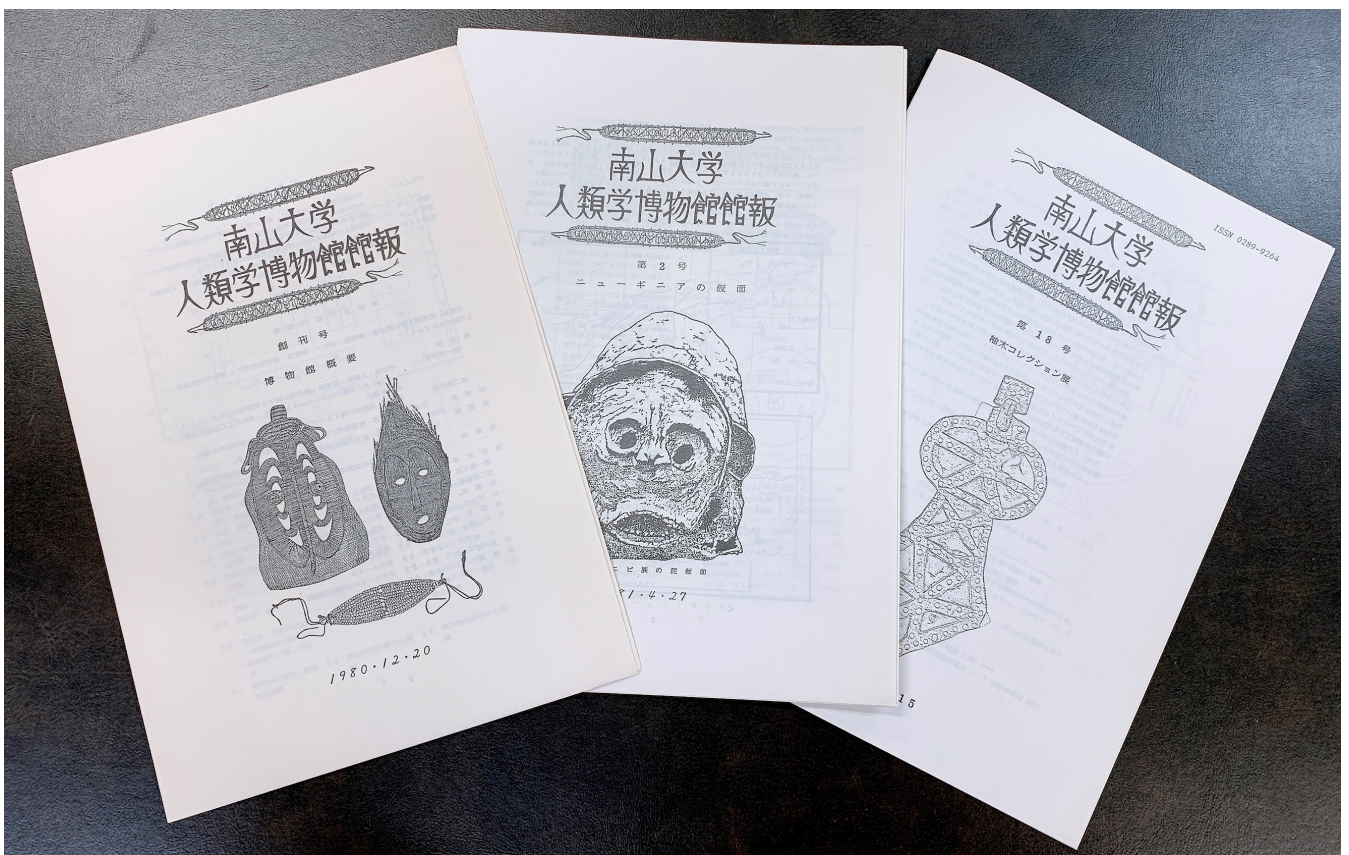




南山大学人類学博物館 MUSEUM notes

- ・ museum notes の刊行
- ・ タイ山地民の衣服—ユーミエン族—
- ・ 博物館と出会う

VOL.1 2020.6

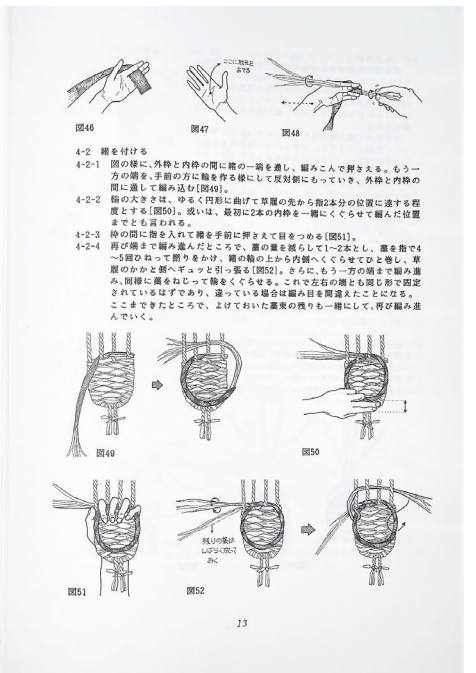
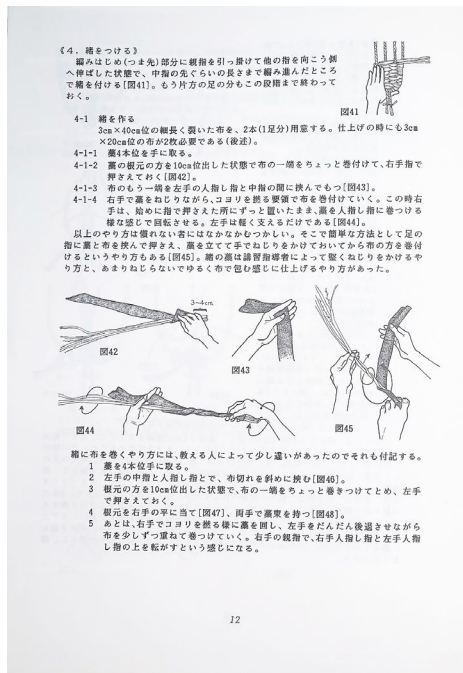


南山大学人類学博物館館報 創刊号・第2号・第15号表紙

museum notesの刊行

南山大学人類学博物館では、一九八〇年から二〇〇〇年までの二十年間、『南山大学人類学博物館館報』と題した冊子を発行してきました。二十年間で出した冊数は三十五冊。さすがにガリ版刷りではありませんでしたが、手作り感のある素朴な印刷物でした。編集・発行は博物館の運営を担当していた重松和男先生です。重松先生は私の前任者で、人文学部の考古学の先生でした。人類学博物館の運営としては例えば昭和の生活史料の蒐集や上智大学生西北タイ歴史文化調査団蒐集の民族誌資料の受け入れなど、今日の人類学博物館の礎を築かれた先生です。そして、この館報の発行も、人類学博物館への貢献の一つに数えてよいと思います。

この館報の特色は、一つには扱うトピックが考古学・人類学・民俗学・博物館と多岐にわたること、そしてもう一つは執筆しているのが大学の先生や専門的研究者ではなく（一部そうした方々も書いてはいますが）、大学院生や学生が中心だったということです。学生や院生が書いたものなんて、と侮らないでください。例えば、第二五号の『藁草履をつくる』という特集は、今から三十年も前のものですが、いまだに問い合わせがあります。おそらくは学校の先生からだと思われませんが、授業で使う素材を探されている中で見つけられたのでしょうか。それにしても、今でも参照され得るレベルのものを出版していたわけで、これはちょっととした驚きでもあります。



南山大学人類学博物館館報 第25号『藁草履をつくる』表紙(左)、p12-13

残念ながら、この館報のシリーズは二〇〇〇年に三五号をもって途切れてしまいました。回、museum notesとして復活することになりました。その理由は様々ですが、一つには新型コロナウイルス感染症の広がりとという未曾有の事態があります。これによって人類学博物館も長期休館を余儀なくされています。その間にデジタル・コンテンツで博物館を楽

しんでいただきたということがあります。また、展示していない膨大な資料を逐次皆さんにご紹介していきたいという思いもあります。かつての館報は紙媒体でしたが、これからはじまる museum notes は、主に Web で公開されますので、気になるとピックを見つけたらいつでもご利用いただけます。記事を書くのは昔と同様、博物館のスタッフ、大学院生、学生が中心です。彼ら彼女らが、博物館資料の研究成果を駆使して、その面白さを紹介していきます。museum notes が昔の館報同様、長く活用していただけるようになることを願っています。

(南山大学人文学部教授
黒澤 浩)

タイ山地民の衣服

— ユーミエン族 —

一九六九年から一九七四年にかけて、当時上智大学教授であった白鳥芳郎氏を団長とする「上智大学西北

タイ歴史・文化調査団」がタイ北部に住む山地民の民族調査を行いました。調査は種族史や宗教・儀礼、社会構造、経済形態と生活技術に焦点を当てて行われました。三度にわたる調査において収集された資料は上智大学に保管されていましたが、調査団員であった量博満氏の退職を機に、南山大学人類学博物館に一括移管されることになりました。民族衣装や生活用具など、二千年を越し、タイ山地民族研究の基礎資料として非常に価値の高いものになっています。

調査団は、タイ西北部のチエンライ州メーチャン県を

基地とし、ユーミエン族、モン族、アカ族、リス族、ラフ族、カレン族各種族の村落を訪ね、彼らと寝食を共にし、聞き取り調査や資料の収集を行いました。

今回は、ユーミエン族の民族衣装の紹介をします。

ユーミエン族は中国湖南省に起源をもつとされる民族です。中国では「ヤオ」族と呼称されています。漢民族の南下などにより移動を開始し、タイ国内へは一九世紀後半に移ってきました。現在ではタイ、中国、ラオス、ベトナムに広く居住しています。タイの山岳地帯に住む少数民族の中で唯一漢字を使用するなど、中国の文化を色濃く受けています。

ユーミエン族の女性の衣服は、赤いポンポンのついた厚手の濃紺の上着に、細かな刺繍の入った大きなズボン、頭

には同じく細かな刺繍入りの布をターバンの様に巻き付けています。

刺繍技術の巧みさが、よき女性であることの証明の一つであったため、ユーミエン族の少女たちは幼いころから、母親から技術を学んでいきました。図案書などではなく、母から子へ、伝統的な刺繍の文様は受け継がれていきます。

また、ユーミエン族やアカ族では、頭に精霊が宿していると考えられているため、みな帽子やターバンを身につけています。人前に肌を晒す行為、ターバンを外す

行為はマナー違反に当たるため、就寝時でさえ身につけていたそうです。子供は帽子を身につけます。七〜八歳になると少女はターバンを巻くようになります。

子供用帽子 左：女兒用 右：男児用



なお、日常的に身につけられていた民族衣装ですが、二〇〇八年に行われた調査時には、日常的に着られるものではなくっており、結婚式やタイ政府主催のイベントなどの特別な機会にしか着用しないようになっていました。

(南山大学人類学博物館
学芸員 井原 瑠梨)



女子袴

女子上衣

博物館と出会う

私が南山大学人類学博物館の存在を知ったのは、大学一年生の時でした。人類文化学科に入りながらも部活で忙しく、実際に足を踏み入れたのは博物館で行われる考古学の授業が初めてでした。博物館はその当時、G棟の地下一階、現在エレベーターがある場所一帯にありました。展示室は第一から第三まであり、様々な資料がケースの中に展示されていました。基本的には資料に自由に触れることはできず、授業中に指定された資料(主に土器)を触察するといった形でした。特に印象に残っているのは、授業の最初に言われた「天井にヒビが入っているのが見えますか。地震が来たら土器のことは気にせず外に逃げてください。土器はまたくつつ

ければいいので」という言葉。先生は、貴重な資料が揃っている一方、施設が老朽化しているということをおもしろおかしく話されました。私はそれを聞いた時、確かに教科書に載るような資料があると割には古めかしい場所だなと思いました。ただ、それと同時に、壊れないようにすることは大前提であるが、展示されている土器のほとんどが展示前に



人類学博物館の展示室

接合修復という過程を経てそこにあるのだということに強く意識させられました。その後の博物館との関わりとして短期アルバイトを経験し、所蔵資料が研究され尽くされている訳ではないという気づきも得ました。博物館で展示されている資料は、何もかもが明らかになっている物なのだろうと思っていたのでとても新鮮な気持ちになりました。

G棟の博物館だった場所は現在、エレベーターホールと資料の収蔵スペース、学芸員養成課程の実習などをを行う場となっています。こちらは利用する機会が少ないかもしれませんが、発掘報告書は全てG棟の資料室にあるため、特に人類文化学科の学生は利用する機会が多くあることと思います。

二〇一三年から、人類学博物館はR棟の地下一階

に場所を移し、「触る博物館」として資料を自由に手に取って観察できるような仕組みをとってきました。現在は新型コロナウイルスの影響を考慮して資料を触るということは当面見合わせていますが、ガラスケース越しではなく、考古資料、民族誌資料を間近で観察することができるのは他にはない特徴です。

専攻分野と博物館が関係なさそうでも、思わぬ発見や興味からきつと新たな関心が生まれると思います。在学生、一般の方はもちろんのこと、新入生の皆さんにはぜひ一度は来館する機会を作ってもらえればと感じています。

(南山大学人類学博物館
学芸員 秦 優莉香)

南山大学人類学博物館

「museum notes」VOL.1

二〇二〇年六月発行

編集・発行 / 南山大学人類学博物館